

太陰暦が台湾の民間社会に与える影響

水原寿里*

The Influence of the Lunar Calendar on Taiwanese Popular Culture

Juri Mizuhara

要 旨 交通の進歩とともに、世界各国間の距離感覚は驚異的に近づいてきた。台湾は日本の隣国で毎年日本からの観光客は90万人以上も数える。台湾観光旅行のスケジュールを調べると、毎日、少なくとも二、三ヶ所以上の寺廟見学があり、その多さに気付かれるはずだ。毎日使うカレンダーも実に内容豊富で太陽暦を右側に、太陰暦を左側に、農時リズムの二十四節気も記してあるほかに神佛の生誕日も書かれてある。

台湾の歴史をみると、常に外族に統治されるが、その住民の構成は中国の南部の福建・広東から移住してきた漢民族が絶対多数を占め、原住民と移住民の農業開墾により、農村社会の秩序ができ、その秩序の根源を調べると、なんと農耕生活と密接な関係にある太陰暦もその役割を果たしている。台湾の人文社会の歴史変遷と民間社会の秩序を整えた宗教信仰が伝統文化の維持を合理的にできることによって支えてきた太陰暦の成立及び台湾社会の内面深層心理にある敬天思想の関係を研究してみた。

一 はじめに

台湾に「宗教・信仰の自由」が現行の中華民国憲法で保障されているため、台湾の民間信仰の形態は極めて豊富で複雑に見え、まるで古くから中国大陆の民間信仰の縮小図であり、展示場の様でもある。

台湾全島には、約6128の村里があるが^(注①)、寺廟は5355ヶ所、教堂は2163ヶ所を数え、合計7518ヶ所に達している^(注②)。また、増え続ける傾向もあり、これらの寺廟・教堂等の建立費用は膨大、且つ技術の精密が要求され、それでも築き上げられることを研究すると神仏に対する敬・誠の心構えと民間社会における人々の生活必須の精神の糧になることが判る。

台湾の民間信仰は神系の結構と儀式の種類によって分けられる。それは、敬天的な信仰・祈神的な信仰・祀鬼的な信仰・敬祖的な信仰・生育求嗣的な信仰・祈求財運的な信仰・疾病治療

的な信仰・建築物の開始式の信仰・及び特殊信仰などがある^(注③)。神仏からご利益を得ると、神仏の生誕日に報恩の演奏、或いは僧侶の読経、家族の写経などが行われる。様々な信仰に様々な神仏があり、これらの神仏たちの生誕日はもちろんそれぞれ違う。古くから旧暦（農暦・農民暦・陰暦とも呼ぶ）に記載してあるから民間社会の人々が神仏宗教関係の事柄であれば、すべて旧暦の日付けにしたがって行なうわけである。

こうして次から次へと祭りが続く日々である。台湾には、この独特な祭りを「拜拜」（バイバイ）と称する。この多彩多様の祭りをよく見ると、台湾の民間社会の信仰・人情・生活の豊かさ・進歩などの深層的な精神面・文化面も研究できるであろう。

台湾の民間社会に「拜拜」のない日は、ほとんど無い。「三日に一小拜、五日に一大拜。」と言われるほどに親しむ。「拜拜」は台湾の南部から北部まで、西部から東部まで、各地で盛んに行われている。

こうして、台湾の民間暦に旧暦の日付けも記

* 本学講師 中国文化・語学

され、神仏の生誕と宗教行事も記され、農業社会における一番大切な農時リズムの二十四節気の移り変りのことをも当然、記されている。暦は新年の元旦になると、新聞と一緒に家々の戸口に届けられ、それを受け取った各家庭の人々に喜びと希望溢れる心を与える。それは悠久なる歴史を持つ中華民族にしたたかさ、明るさを再注入する精髓である。

中国人の先祖たちが長い年月をかけて計算・測量・忍耐・叡智の上で産み出した暦の合理性を再認識することで、太陰暦を生活史の遺物とせず、先人の成果によって文化文明創造の潜在力たる太陰暦の Renewal (再興) は、社会秩序の安寧の一助となることを感ぜずにはいられない。

二 台湾住民の形成

1. 中国からの漢民族：

台湾は中国南東部にある省。台湾島のほかに澎湖諸島、火烧島、蘭嶼などの合計83の属島からなり、英語ではフォーモサ (FORMOSA) と呼ぶが、これはポルトガル語の〈美しい〉に起源する。その面積は3万6千平方キロメートルで、大きさは日本の九州とほぼ同じぐらい、人口は2千万人である。

台湾に人が住み始めたのがいつ頃かは、まだはっきりとわかっていない。最近になって、台南県から約2万～3万年前のものと思われる人骨と台東県から約1万5000年前の石器が発見考証され、西海岸を中心に各地から中国大陸系と南方系の二つの先史文化の土器が発掘されている。その後、継続的に発展したかどうかの実態は明らかではない。

中国と台湾島の間には、幅150～260 km の台湾海峡があり、この地縁の関係で古くから中国と台湾の間に密接な行き来が始まっていた。

調べてみると、漢籍に載る台湾最古の記録を一部の学者は戦国時代(前403～前221)の地理書〈禹貢〉(『書経』の一篇)にまでさかのぼり、同書の「島夷」を台湾と見立てる。だが、3世

紀半ばの『臨海水土志』に「夷州」と見えるのを台湾史最古の現存記録とみるのが通説である。

3世紀末の秦漢時代で、班固(32～92)著の歴史文献『漢書』(注④)東夷傳の記載により、「海外有東鯤人」、「島夷」、「東鯤」は、いまの台湾と流求あたりを指す可能性が高いと考えられている。秦の始皇帝の命令により、童児3000人を引き連れ、当方の蓬萊国へ不老長寿の仙薬を求めて、旅立った徐福が辿りついたともされるが、これも定かではない。一節に徐福は日本和歌山県の新宮に漂着したといわれる。

その後、約550年を経て、晋(265～419)の陳壽の歴史文献の『三国志』(注⑤)のなかの孫権伝には、揚子江下流域を版図とした呉孫権が衛温と諸葛直を1万の兵を夷州に派遣と記されており、これは人口不足に悩む呉国が人狩りをもとの目的としたものだが、逆に1割の兵しか戻らなかった。この「征夷州」の「夷州」が台湾島と確かの史料により判定でき、呉国へ帰らなかった兵の多くが、台湾の地に定住したと考えることもできる。

さらに6世紀末に中国を再統一した隋朝の第2代皇帝隋煬帝がいて、魏徵(580～643)(注⑥)著の『隋書』(注⑦)の流求国伝により、607年隋煬帝が流求(台湾)に朱寛と何蠻を派遣し、鹿港に上陸し、宣撫工作を試みたが、不成功に終り、男女数千人を捕虜して来たと記されている。この流求の表記文字は異字多種があり、瑠求・琉球とも記され、沖縄(琉球)の存在が明らかになると文明化の度合によって、「小琉球」とされ、区別されている。馬端臨の文献通考の記述によれば、「流求国在泉州之東、有島曰澎湖、煙火相望、出行五日而至。」となる。

唐朝(618～907)、五代十国時期(907～960)、宋朝(960～1279)まで、中原は戦乱に明け暮れ、台湾に避難する人々が続く。

南宋孝宗隆興9年(1171)、泉州知事汪大猷が澎湖に軍民を派遣し、馬屯を行なった。これは漢民族の本格的な台湾移民の始まりとも言える。宋朝(注⑧)末期の12世紀終り頃に、雅美族と

思われる毘舍耶人が2回にわたって、澎湖島と福建省を襲ったことがあって南宋寧宗開禧2年(1206)、台湾を版図に収めようとした。

元の時代(1281~1367)になると、貿易の拓展のため、南方海の経営について、時に積極的に取り組み始め、元世祖フビライは至元29年、楊洋を瑠求に派遣し、また元成宗元貞3年(1297)には、瑠求に軍隊を派遣し、瑠求の招撫を試みたが、応じられず、元寧宗至順6年(1335)澎湖島に巡検司を設置し、福建泉州同安に隸属した。これがすなわち中国が、台湾に対して建置の始まりとも言える。14世紀前半、澎湖島と福建省の泉州とでは盛んに交易が行われていた。

14世紀後半の元末明初は中国南部の閩粵地域に生存競争が激しくなり、人々が冒険的に出洋し、台湾まで開墾し、その時、始めて民間個人的な活動が主として台湾に対して割と大規模の開発が行なわれたと言える。

15世紀始めに7回にわたって、明朝が「鄭和派遣西洋」の政策を取り、鄭和の艦隊を遠くアフリカまで派遣したが、その間、赤嵌(台南)で水を補給したという。1563年明朝、台湾本島に巡検司を設置し、さらに1597年台湾に衝鋒游兵を設け、防備にあたる。この頃、漢人の渡台が一段増加する傾向が現れる。

16世紀大航海時代を迎えて、東洋へ進出して来た西欧人の先兵となったポルトガル人は、沖合から台湾を見て、「イラ・フォルモサ=うるわしの島」と呼んだ。また、日本ではかつてこの時期に台湾を「蓬萊の宝島」とも呼んでいた。

2. オランダ占領時代(1626~1662)

17世紀初めに台湾に外来勢力の本格的な侵攻が始まり、1609年日本から豊臣秀吉(1537~1598)が有馬晴信を派遣し、高山国(台湾)に国書進呈の試みをしたが、これは実を結ばず、1616年日本の徳川幕府が村山等安を派遣し、台湾の遠征を試みたが、失敗に終り、同じ時期、オランダがスペインから独立し(1581)、香料貿易の独占を図り、積極的に東南アジアへ進出した。東インド会社創立の1602年にポルトガルの根拠

地マカオを攻撃し、撃退されると翌年1603年にもう一度攻撃しようとしたとき、台風に遭い、澎湖に上陸。澎湖島を占領、明の警告で一旦は引き上げたものの1622年オランダ軍が澎湖を本格的に占領し、島民を虐待した話が続出する。そして、撤退の条件として、「台湾が明朝の領土外である」ことを認めさせ、台湾本島の攻略に向かう。1624年オランダが明との協定により、台南に入城し、南部台湾を領有する。

澎湖島は台湾海峡の真ん中に位置する交通の要衝であるから、明としては、そこを外国が押さええては困る。しかし、台湾本島のような人を食う人たちが住んでいる島なら、オランダが占領しても一向に構わないという考え方もあったと見える(注⑨)。

オランダは台南の安平(当時は島だった)にゼーランジア城(Zeelandia)を築き、対岸の赤嵌にプロビデンスシア城(Provintia)を築く。台湾支配を強化しつつ、台南一帯で砂糖キビ中心の経営を開始した。当時の台湾は中国の生糸を渴望していた日本が中国の海禁策により直接貿易できないため、中継交易をする地でもあった。しかし、オランダがこの生糸の輸出に課税したので、浜田弥兵衛の監禁事件もおきた(注⑩)。

一方、オランダの台湾進出をみたスペインも台湾本島に根拠地を持つとした。当時、フィリピンを植民地として領有し、東洋の根拠地とし、新大陸の銀で中国貿易を握りつつあったスペインは西北部へ向かい、1626年から26年間をかけて、三貂角(三貂堡)、鷓鴣(基隆)湾の和平島(社寮島)、滬尾(淡水)にサント・ドミンゴ砦を築き、台北盆地へも進出した。しかし、オランダ側の攻勢により、1642年には淡水のサンド・ドミンゴ砦が落とされ、スペインの勢力は台湾から駆逐された。

こうして台湾本島はオランダ単独の領地になった。オランダは文字を持たなかった原住民の平埔蕃にオランダ文字で部族語を表記することを教えた。台湾最初の文字である。この文字で書かれたものは部族の名をとって新港文書と呼

ばれる。

オランダはまた、製糖業を興すために、甘蔗の栽培を始め、中国大陸から労働者を募った。こうしてオランダ時代の末期には漢族系人の数は5万人に増え、当時の原住民に匹敵するまでになっていた^(注⑩)。

3. 鄭氏王朝時代 (1662～1683)

オランダ占領時期の末期に、漢民族による台湾の開拓も進んでいった。1621年には海寇首領顔思齊が嘉義に近い北港に居を構え、開墾を始めたという。

また1628年には、明朝の招撫で投降した鄭芝龍が饑饉に見舞われた福建省から数万の農民を集め、資金と耕作用の牛を与えて北港周辺の開発を進めた。

1644年、中国大陸に李自成の乱で華南に兵火がおよび、難民数万が台南に移住する。そして、1661年明朝にかわった清朝に対して抵抗していた鄭芝龍の息子鄭成功が2万5千の水軍を率い、澎湖進攻、台湾本島攻略、ついに12月にはオランダ投降した。明朝から明朝皇帝の姓である「朱」を賜ったため、国姓爺として知られている鄭成功は、台湾に入ると、いまの台南市を承天府を置き、主都とし、東部（のちに東寧と改称）という名称の独立王朝を樹立した。オランダ人を台湾から追い出したのは、その翌年のことである。

1662年、オランダはジャワへ引き上げる。福建・広東など大陸沿岸の漢人渡台者が激増し、在台漢人が20万人に登る。鄭成功は台湾を手に入れたとは言え、その始終の目的は台湾にあるのではなく、清朝を打倒して明朝を復興することにあった。

鄭氏による台湾経営は、まず1府2県1司^(注⑪)の制度をしいた。移民の奨励と屯田兵により、開拓は進み、人口も安定して増加し続ける。台湾の開発は、点から面に分布して来た。

鄭氏は台湾の漢民族支配を確立した62年に僅か37歳で病死した。以後1683年までその子鄭経と孫鄭克塽による政権が維持された。1673年清に三藩の乱が起こり、鄭経が福建・広東を攻撃

したが失敗に終わった。

1679年清朝から使節を派遣し、鄭経に独立を勧告したが拒否された。清聖祖康熙22年(1683)に鄭克塽の降伏により、3年23年間の統治が終焉を告げた。

この23年間に、恒春・嘉義・鳳山・斗六・彰化・新竹が開発された。台湾現地に従来の製糖業のほかに煉瓦焼きが導入され、製塩業も興った。日本・フィリピン・シャムとの貿易も盛んであった^(注⑫)。

4. 清朝時代 (1683～1895)

1684年康熙23年に中国と台湾の一体化が実現された。清は台南に台湾府を設け、台湾（台南）、鳳山（高雄）、諸羅（嘉義）の3県を置くも独立した省ではなく、福建省に隸属したが、台湾が初めて中国王朝の一部になったのである。この頃、台湾在住の漢族系人とは15万人ほどに増加していた。鄭経が連れて来た後統部隊と大陸からの家族の呼び寄せなどによるものである。清朝の治下で台湾の全体人口は30万人に達していて、全島の統一名称は「台湾」と称した。

この時期、台湾に逃げ込んだ読書人（インテリ）には、進士（最上級の国家試験に合格した人）の盧若騰・王忠孝・辜朝薦・沈庭佺期などがいた。彼らは明朝で高級官僚を経験したこともあって、中国の文物を台湾に導入した。

1721年には鄭氏一族の武將と伝えられる朱一貴の乱が起こり、朱は天地会を作り、「誓滅清明、扶回大明江山」をスローガンにして、羅漢門を攻め、台湾全土を巻き込んだ。年号を永和とし、自ら中興王と名乗るが1723年清世宋雍正元年、浙閩総監の満保により、朱一貴を捕縛し、乱を平定し、台湾に1県（彰化）、2庁（澎湖・淡水）を設置した。

1840年イギリス側が中国との自由貿易を求めた時のいざこざにより、中英アヘン戦争が勃発し、英国軍が台湾近海に遊弋、19世紀も半ばをすぎると、産業革命の波に乗って、再び西欧からの進出が台湾にも訪れた。1854年米極東艦隊司令官ペリーは鷓籠（基隆）を調査し、第2次

アヘン戦争後、1858年中国とイギリス・フランス・アメリカ・ロシア四カ国と天津条約を調印し、台南・淡水を開港することに、更には1863年に高雄（打狗）、基隆（鷓籠）を開港することにいたった。

19世紀の後半に入ると、新たにいくつかの国が台湾を狙うようになった。1868年日本は明治維新を断行し、1874年日本が兵を興し、台湾の恒春に登陸し、殺戮を行ない、清廷は沈葆楨を派遣し、抗争したが、日中北京条約を締結し、1879年琉球（沖縄）は日本に帰属し、1884年清仏戦争により、フランスが基隆・澎湖島占領などの状況になった。そこで清朝は始めて台湾の重要性を認識し、台湾経営に心を砕くようになり、1885年清光緒11年福建省から独立して台湾省が誕生した。清朝における近代化運動、いわゆる洋務運動によって、台湾の近代化も進められ、沈葆楨・丁日昌らは行政改革や通信の整備、鉱山開発に力を尽した。また、台湾省の成立により台中から台北へ省都が移された。1886年、初代台湾巡撫として着任した劉銘傳は精力的に台湾の経営にあたり、1886年から1891年までの在任期間に数々の功績を成し遂げた。道路を改修するほか、台北・新竹間に鉄道が敷設され、新式汽船による航路を開拓することによって、交通の便を図り、郵政制度を設け、電信設備の通信簡便化を図ったのである。このほか、産業の振興と貿易にも力を入れ、また土地調査によって租税の公平化を図り、山地開発が一層進み、山地開発により、大溪を中心に財を築いたのが林家花園を残す林本源家だった。また、土地所有を明確にすることによって、乱れていた土地制度を整備した^(注③)。

5. 日本統治時代（1895～1945）

1894年に日清戦争が起こり、戦争に敗れた清国は1895年4月の下関条約により、日本へ台湾を割譲したのである。当時の日本人は、清国の漢族系知識人から倭奴（わど）と軽視されており、台湾在住の漢族系知識人もその影響を受けていた。ところが、逆にその倭奴の国、日本が台湾を領有することになったのである。当然、

台湾在住の漢族系知識人の間から反対の声が上がった。彼らは清国朝廷に嘆願を重ねたが、いくさに敗れた清国として官吏や将兵に戦意は乏しく、また日本軍が主都の北京に進攻してくることが恐しかった。台湾からの嘆願を無視したのである。

そこで、漢族系知識人たちは日本の領有に抵抗し、当時施政者として最高の地位にいた唐景崧を大統領の座に推し、1895年5月23日台湾独立宣言を発表し、5月25日「台湾民主国」を成立した。しかし、帝国日本が清国との講和条約により、台湾を接収するために、軍隊を派遣し、台湾に上陸することになると、これをみた民主国の首脳たちは相次いで逃げ出し、11月3日日本は劉永福脱出後、台湾全島平定を宣言し、民主国の歴史は4ヶ月と26日にとどまり、その寿命はきわめて短かかったため、その時代を台湾史の一つの時代に入れられない歴史家もおおぜい居る。民主国の存続期間に抗日ゲリラ運動で生じた台湾側の死者数は1万4千人だった。当時の人口は260万人だったから、相当高い比率である。

1898年の清光緒24年、立法権を持つ独裁者として、着任した台湾総督児玉源太郎、民政局長官後藤新平のコンビは、アメと鞭を使い分け、地元有力者の協力を獲得する反面、ゲリラを徹底弾圧して厳しい植民地政策をとり、台湾人の抵抗運動を武力と極刑によって鎮圧した。

こうして、「日本の工業・台湾の農業」の政策の下に、台湾の農業生産は増大したが、日本統治への抵抗運動の底流としてあった。もちろん、新興帝国主義国家としての日本は植民地の台湾に対する漸新の建設も行ない、港湾・鉄道・道路などの再整備、国民学校から帝国大学にいたる各種の学校を創立させた。特に台湾の衛生状態が著しく改善できた。こうした日本の植民政策は現在の台湾にも影響している^(注④)。

6. 中華民国時代（1945～）

1911年（清宣統3年）10月10日黄興らは広州で黄花崗七十二烈士辛亥革命事件をおこし、1911年11月13日孫文が南京で中華民国臨時大総

統に就任。この日は太陽暦の元旦にあたり、太陽暦の採用を決定し、この日を中華民国元年元旦と定めた。宣統帝が退位し、清朝は滅亡した。アジアで最初の民主共和国誕生ともいえる。

1913年には抗日運動代表羅福星（苗栗）により、抗日運動が強まり、1914年に西來庵事件の主謀余清芳の死刑判決と呼応する革命運動に対し、弾圧が行われた。さらに、地主登録のない土地を国有化する動きに反撥し、1930年には秦雅族による日本人虐殺の霧社事件^(注⑨)がおきた。

1945年8月第2次世界大戦が終了した。日本の敗戦により、台湾は中国に復帰した。1949年中国共産党が本土を占領した後、蒋介石政府が大陸から台湾へ移り、蒋介石は中国国民党総裁として中国の西南、舟山、台湾の各地に奔走し、軍政人員を指導して、狂瀾の時局を挽救して台湾・澎湖・金門・馬祖の基地の安全を確保するため、民生の安定に努力しつつ台湾経営にあたった。

このように台湾の歴史はまさに大海の中の小船と云ってよい程、外圧の利害干渉の大波に揺り動かされ、漂って来た歴史であった。この中で外国文化も多様な形で入り込み、多様な神々も入り込んだと云える。

三 暦の発展史

1. 暦：

英語のカレンダー Calendar はラテン語の Kalendae（ローマ暦のついたち）という言葉に由来していて、勘定を精算しなければならない日という意味であった。現在のカレンダーすなわち暦という言葉は、一般に日常生活で、日などの時間の区分を数えるものの意味に使われている。現在世界の主な国で日常生活に使われている暦は十六世紀にこの暦を採用した教皇グレゴリウス十三世の名にちなんでグレゴリオ暦と呼ばれている。年代学も暦の発達と密接な関係がある。

この頃では次の順に従って、世界各地で有史前から現在まで行われてきた主な暦法について述べる。

2. 原始的な暦法：

日・時間・週・月・季節・年・古代の時の測り方によって種々の暦がある。例えば、ローマ暦、ユリウス暦、グレゴリオ暦、中国暦、エジプト暦、ヒンズー暦、バビロン暦、ユダヤ暦、ギリシャ暦、イスラム暦、マヤ暦、日本の暦などがある。

3. 中国暦の形成：

古代中国では日・月・年を十干と十二支を組せた六〇千支からなる周期で計算した。一周期中の六〇個のおのおのは、干の名と支の名を連ねた二重の名前で区別する。六〇の周期を一巡するには十干の名称はそれぞれ六回ずつ、十二支の名称はそれぞれ五回ずつ現われる。

この十干、十二支の名称のうちいくつかの起源は前二十七世紀にもさかのぼるといわれているが、この周期はいつ頃作られたかを正確に知ることが難しい。

殷墟から発掘された甲骨文字によって干支は初め、日の順番を示すために使用されたことが明らかになった。六〇日を十日ずつ、六つの「旬」に分け、各旬の第一日の名前が甲から始まるため、この周期を「六甲」ともいった。六〇日の周期はあらゆる時代を通じて中国暦の特色であり、朝鮮、日本、ベトナムなど中国文化の影響を受けた近隣諸国においても同様である^(注⑩)。

殷の甲骨文字や周時代（前1122～前256）の銅器には、この周期を月や年にまで用いた例は記されていない。しかし、周末期の記録には太陰月の番号や王の統治年数に循環する名称をつけたことが示されている。前五～前三世紀の歴史、天文についての文献は前七世紀から十二支を年の番号に使っていたと述べている。この十二年周期の各年には、「歳星」すなわち木星が通過する黄道宮に関係した名前がつけられた。

中国の常用年は通常、三〇日からなる「大の月」と二十九日からなる「小の月」を交互に並

べた十二月からなる。但し、イスラム教の太陰年と違い、常に太陽年の長さに合うように調整してある。この調整は次のようにして行われる。(一)三常用年の周期で一回閏月をおくか、五年の周期で二回閏月をおくか、十九年の周期で七回閏月を置く。(二)分点と至点を固定点として太陽年を十二気に等分し、各気を二種類に分け、奇数番目を「節気」、偶数番目を「中気」と呼ぶ。二十四等分したものを二十四節気と呼び、中国暦が太陽暦の二至点・二点分を取り入れるから「陰陽合璧」なので太陰太陽暦という。農民は二十四節気に従って農業を営んだ^(注⑩)。

四 台湾における太陽暦・太陰暦の使い分け

台湾の民間社会に使用している暦は、日暦と称する。一日一枚で、一日をすぎると、切り放すのが通常である。暦の右側に太陽暦、国家祝祭日はこの右側の日々順に従って挙行する。例えば、開国記念日（1月1日）、児童節（4月4日）、労働節（5月1日）……国慶記念日（10月10日）、台湾光復節（10月25日）……等がある。もう一つは左側に印刷されてあるのを陰暦（農曆）と称し、これにより民族的・宗教的行事、「節句」などの中国伝統の祭りや神々の生誕祭りを挙行するのである。陰暦を併用することに現在台湾に生きる庶民信仰のところが伺える。

台湾の民間信仰は、山岳地帯の原始宗教を除くと、福建・広東など中国南部から移入されたものである。したがって古代の敬天的な自然崇拜の原始宗教から始まり、のちの儒教・道教・仏教などの多神教をふくむ多くの宗門宗派が存在している。

台湾の憲法が宗教の自由を認め、保障されることで台湾の民間信仰の形態は極めて豊富で複雑に見え、まるで中国大陸の縮小図である。

台湾全島には約6128の村里があるが前述したように寺廟約5355ヶ所、教堂は約2163ヶ所があり、合計で7518ヶ所に達してある。また増え続

けていく傾向もありうる。つまり、1村里に平均一つ以上の宗教的施設があるということになる。

日本統治時代(1895～1945)の占領期間中は、宗教活動が制限され、国策としての神道などが持ち込まれたが、例えば台湾神宮など80余神社が建てられたが1945年日本の降伏により廃絶された。戦後の宗教活動はすぐ復元し、さらにアメリカなどの影響もあって、プロテスタント、カトリックがめざましく普及している。信仰としては、道教の比重が最も大きく見られ、道教の各種儀式は庶民の生活に密接に関係している。生命発展の各過程における生・老・病・死等に対応する儀式がそれである。

道教は漢民族の固有的な宗教で、その源流を辿ってみると、上古時代に至るが、真に完成の儀式に成熟して社会の人々の心に伝えられるようになるのは漢朝張陵（張天師）(215年)の五斗米教の創始から始まる。いままで二千年の歴史も持っている。道教の歴史的発展から見ると、大別二つの宗派になる。一つは「修鍊養生」を主にする「全真派」。もう一つは専らに符咒を配って「濟世渡人」を主にする「正一派」である。前者は長江流域より北の方へ発展した。教徒は出家して結婚しない。一年中「清浄素食」（「清浄料理」）を取る。一生「宮觀」のなかに住み、修行する。後者は長江流域より南の方に分布してある。また「天師派」とも呼ばれる。道士は民衆とあまり区別なく。結婚、子育てを許されるし、「宮觀」のなかに住まなく、一般人と同じ生活をする。ただ儀式を受け持つ時に道士身分の道袍と劍符咒などの祭神ショーを挙行する。

総合的にみれば、台湾の民間信仰は神系結構と儀式の種類によって、分けられる。信仰の種類によって、敬天的な信仰・祈神的な信仰・祀鬼的な信仰・敬祖的な信仰・生育求嗣的な信仰・祈求財運的な信仰・疾病治療の信仰・建築物の開始式の信仰、及び特殊信仰などがある。また、儀式を挙行する時の信者団体をみると、集村式と個体式の二つがある。集村式というの

は、郷・鎮・市を祭区として活動する。個体式というのは、家庭か個人かを一つのユニットとして活動する^(注⑧)。

このように様々な祭拝により、台湾の寺廟の主神は247種もあり、そのうち大陸と同じ神明は玉皇大帝、玄天上帝、神農大帝、五顯大帝など49種がある。様々な神仏の生誕があり、すべて古くからの旧暦の日付けで決められている。これほどたくさんの神仏があることから、次から次へと、旧暦に沿って祭りが続く。台湾には、この独特のまつりを「拝拝」(バイバイ)という。色とりどりの必要に応じる神仏の生誕祝いもよく行われていることが東アジア地域にある台湾独特な民俗色彩である。

「拝拝」のない日は、ほとんどなし。「三日に一小拝、五日に一大拝」といわれるほどに「拝拝」は各地で盛んに行われる。とくに旧暦の一日、十五日の夕方になると、各商店が店先で「拝拝」を行ない、商売繁盛を祝う風景が台北市から南への台南・高雄まで、あちらこちら見られる。

「拝拝」の日には、一家を公開して、ご馳走を振るまう。テーブルに山のようなご馳走を盛り立てて、来客を持って成し、見ず知らずの人が割り込んでも、追い返されることはない。こうして、台湾の民間暦(太陰太陽暦)は、すなわち「拝拝の暦」とも言えるであろう^(注⑨)。

五 太陰暦の二十四節気と民間社会

台湾は天候・気候からみると、北回帰線が台湾島中部を貫き、熱帯と亜熱帯気候が併存、夏が長く、冬は短い。四季は不明瞭で、5月中旬から6月初旬は、梅雨である。夏季から秋季までは台風のシーズン。中南部の夏季には、毎日のようにスコールがある。北部では冬季に比較的、降水量が多い。年間の寒暖温差度は厳しくない。全般的に温暖で、凌ぎやすい気候である。

台湾は古くから農耕社会で、四季の移り変りの少ない気候なので、農時の生活に多大な不便

を生ずる。このため、四季に合わせた暦年を定めることが必要とされる。朔望日を守り、しかも暦年を季節に合わせるように工夫したのが太陰太陽暦である。

台湾に漢民族の移住により、持ち込まれたこの太陰太陽暦は一般農民開墾、田植、生、老、病、死、冠、婚、葬、祭の根拠になり、長く使われてきたわけである。そのなかに、民間社会の各々場面・天時に関係のある二十四節気に述べてみたい。まず二十四節気表を紹介する^(注⑩)。

二十四節気の農民社会におけるはたらき：

①「立春」、春の息が大地に来たり、萬物の生成化育が展開し始まる。上の皇帝から下の「販天走卒」まで、この日の来臨により、心に喜びと希望が湧いてくる。古籍左傳曰：「立春為啓，立冬為閉」，春は一年の始まり、「一年の計は春にあり」，「啓」の文字に無限の可能性が生命に託す。「農業立国」の台湾にとって春の存在する意義が極めて大きい。周朝から朝廷に「祀春儀式」を行なう。迎春式典に皇帝から全国民に農業生産の始まりの信号でもあり、はげましにもなる。宋朝以後、元、明、清も同じく祭春の行事を行なう。台湾の政府はこの日を「農民節」として定め、優秀な農民を選出し、表彰する。

②「雨水」、大地解凍、雨水充沛。この時期農作を全面的に展開する季節になり、農忙時期なので式典を省略された。

③「驚蟄」、古くから中国人の考えに春雷が鳴ると、冬眠していた虫類が目醒めて動き始まる。虫害に注意を促す。

④「春分」、地球が太陽を一周まわることを360°とする。春分は0°、夏至は90°、秋分は180°、冬至は270°、また春に戻って360°。春分の日には太陽が丁度黄道と赤道の交差点にくる。昼夜の長さが同じくなるこの日を過ぎると北半球の昼が次第に長く、夜が次第に短くなる。(南半球相反)春分になると、「草長鶯飛、春光明媚」という諺も台湾に多く詠ってある。

⑤「清明」、淮南子天文訓：「斗指乙，清明風至」萬物孳茂，氣清象明という。中国華南地方

太陰暦が台湾の民間社会に与える影響

季節	節気	太陽黄径	陽 曆	陰 曆	意 義
春 90天 18小時	立春	315°	2月14日或5日	正月節	春季開始
	雨水	330°	2月19日或20日	正月中	雨水増加
	驚蟄	345°	3月5日或6日	二月節	始雷，冬眠動物驚醒
	春分	0°	3月20日或21日	二月中	晝夜平均
	清明	15°	4月4日或5日	三月節	天氣溫暖・景氣新鮮
	穀雨	30°	4月20日或21日	三月中	雨水增多
	立夏	45°	5月5日或6日	四月節	夏季開始
夏 94天 1小時	小滿	60°	5月21日或22日	四月中	農作物開始飽滿
	芒種	75°	6月6日或7日	五月節	麥豐收，稻種植
	夏至	90°	6月21日或22日	五月中	此日白昼最長
	小暑	105°	7月7日或8日	六月節	天氣漸熱
	大暑	120°	7月22日或23日	六月中	天氣悶熱
秋 91天 20小時	立秋	135°	8月7日或8日	七月節	秋天開始
	處暑	150°	8月23日或24日	七月中	天氣漸涼
	白露	165°	9月8日或9日	八月節	天涼有露水
	秋分	180°	9月23日或24日	八月中	晝夜平均
	寒露	195°	10月8日或9日	九月節	天氣漸寒
	霜降	210°	10月23日或24日	九月中	天氣轉冷開始有霜
冬 88天 15小時	立冬	225°	11月7日或8日	十月節	冬天開始
	小雪	240°	11月22日或23日	十月中	開始飄雪
	大雪	255°	12月7日或8日	十一月節	開始下大雪
	冬至	270°	12月22日或23日	十一月中	此夜最長
	小寒	285°	1月5日或6日	十二月節	天氣寒冷
	大寒	300°	1月20日或21日	十二月中	天氣酷寒

に清明雨落の時期でもあって、詩人云：「清明時節雨紛紛，路上行人欲斷魂……」と嘆く。民俗節句からみると、論語に「慎終追遠，民德歸厚矣。」東漢朝廷が隆重の大典を行っていた。唐朝皇室が寒食節（清明の三日前）に「上山祭陵」を挙行し、百姓もこの日を祭掃墳墓として許可された。宋朝が「清明掃墓」を行ない、明太祖洪武2年（1369）正式に清明と中元が祭祖掃墓の日を規定し、それかれ今日にいたる定俗になった。台湾において毎年太陽暦の4月5日を「民俗掃墓節」として休日になる。

⑥「穀雨」、この時期になると、偶に陣雨に遭い、雨水量が丁度農作物の成長に合わせているように感じられ、先民がこの日を「穀雨」と命名したわけである。

⑦「立夏」、夏季開始の意。淮南子天文篇：「立夏，大風濟。」強い東北季風が止まり、陣雨季が終え、河々が満水位で灌漑用水の心配なし。農業社会にとって安心と喜び溢れる季節であり、「七家粥」、「秤人」等の習俗がある。「七家粥」は隣同志が互いに米・麦を贈り、五色豆類（紅豆、緑豆、黒豆、米豆、土豆）を加わえ、

甘い粥を家族全員に配り、夏補という、夏バテを防ぐこと。「秤人」は体重を測ること。台湾の政府は「国民健康検査」を行ない、国民に健康に注意するよう、呼びかける時期である。仏教の僧侶たちにとって、この立夏を「結夏」といい、寺廟内に読経勤行し、外に「寄付化縁」に行かない時期であるのは「萬物澆刺、生成化育」外に動き回ると、虫蟻類を踏み殺すことが多くなることへの慎みで、「殺生」を戒めることもあるという。

⑧「小満」、農耕多忙の煩忙時期、台湾村莊記事：「郷村四月間人少、才了蚕桑又挿秧。」この節氣に一部の「菓菜穀物」が実り始め、例えば、桃、李、杏、梅、蕃薯、稲作、麦等の作物、収穫の時期はまだ先だが少し苦勞が報われ、果実が目に見えるため、少しの満足心があり、乾旱、大雨、虫害が無ければ、万事順調になる。

⑨「芒種」、芒ある農作物、穀類が澆刺と生長する。淮南子天文篇：「芒種、音比大呂」、呂というのは「萬物萌動於天下之意」。

⑩「夏至」、夏が確定的にきた。この日の昼はもっとも長い「最長的一日」という。地球は楕円形で、また23°の傾斜角度で太陽のまわりを楕円形の軌道に沿って、公転するから、毎日の昼夜の長さは違ってくる。北半球は夏至の日に昼が普段と比べて特に長く、南半球は相反して夏至の日に昼が一番短かいわけである。

⑪「小暑」、5月末6月初め、気温は高いが、暑さの極点にはまだ至っていないときが小暑。この時期にあまり暑くなると、農作物の実りが悪くなる警句の意がある。

⑫「大暑」、謂る「暑氣逼人」の季節となり、一年中一番酷く暑い時期になる。この時期に暑くはなかったら、冬の「多雨多雪」の現象の兆である。農民たちは、この時期になると、とくに敏感で暑ければ暑いほど収穫の実も確実になるからである。

⑬「立秋」、秋の氣配が始まるきざし。この時期に「大暑餘威」があるけど決定的に秋になりつつ、爽やかな黄金色の秋風がやってくる。古くから、この日になると、皇帝が衆臣を率って

西郊の広場に「迎秋」の儀式を挙行し、その後、宋廟を祭祀する。このような儀式は代々相伝して定式の「秋祭」になる。民国政府も例外なしに立秋の秋祭を行なうわけである。古代の軍事将帥が立秋になったら、士兵を召集し、農事後の戦備訓練を進め、司法を掌管する刑部官吏たちは一年の刑案を清理し、平反したり、執行したり、秋季まで処理を済ます規定があった。

⑭「處暑」、秋に入ったが、この時期の西南気流はまだ旺盛で、赤道近くの暑気を引き込むため、午後の俄か雨が無ければ、盛夏の暑さになる。夏の「廻光反照」（行き去る前の未練）というかまた「秋老虎」とも称する暑さの譬之がある。

⑮「秋分」、一年の二分点、すなわち春分と秋分、この二日間に太陽が黄道と赤道の交差点にくる、赤道に日射が直接受ける関係で「秋分」の日をすぎると、昼は次第に短かく、夜は次第に長く、冬至になるまで続き、「冬至」の日を過ぎると、また次第に減っていく循環になる。簡単に言えば、一年四季と二十四節氣の気候変化の規律になるわけである。

「秋分」になると、秋季がもう半分過ぎたということで、深秋に接近することによって、東北季風が日増しに強勁してくる。北方の鳥たちが南の方へ飛んでいく「燕南飛」「孔雀東南飛」などの名句がある。南方の鳥類も南下してくる寒風に防禦できるような巣作りで大忙しい。空気の乾燥により、収穫にもってこいの時期で、「農忙」の原因になるわけである。

⑯「白露」、陰気ようやく重なり、露ごり、白く見える露の時期である。この時期は台湾の台風シーズンで、台風が来なければ、毎日爽やかな感じがする。いわゆる「行楽の秋」「読書の秋」「スポーツの秋」などがある。台湾の政府はこの「白露」の時期の陽曆九月九日重陽の日に「体育節」と定めてある。

⑰「寒露」、朝晩に「晨露」と「夜霧」の発生があり、寒気が心まで沁みるから寒露という。この時期に台湾の東北季風が一層強くなり、大雨を挟んでくる。「秋風秋雨愁煞人」の季節俗

諺がある。

⑱「霜降」、露が陰寒の気に結ばれて霜となり降りてくる。この時期になると、収穫完了、農作物を穀倉に入れ、農民の満足の笑顔が見られる。

⑲「立冬」、西南気流が旺盛になり、東北季風を抑制することがあって、何日間の暖かさをもたらし、謂る「十月小阳春」。古代からこの立冬は神聖の日として重要視されており、史記により、毎年立冬の三日前、太史が皇帝に立冬の日を報告し、皇帝から大典籌備の詔を下す。立冬の日に皇帝がまず齋戒沐浴をしてから、文武百官を率い、京城北郊の広場に「迎冬」の儀式を行なう。式典の進行は慎重にみえる。迎冬の後、朝廷に戻り、「賞死事・恤孤寡」の詔を下す。「賞死事」とは「因公殉職、守土捐軀」の文武遺族に撫恤を恩賞すること。「恤孤寡」とは孤苦貧病の百姓を援助すること。いまでも台湾の政府は、この心を忘れずに毎年「立冬」がくると「十大残障傑出青年表揚」、「十大優秀模範農民」……など優秀な人の表彰を行ない、往時の残を止めている。一方、政府各階層では「孤児院」、「養老院」、「台澎金馬前線国軍官兵視察團」などでも特別な行事が行なわれている。

⑳「小雪」、寒波が南下して、雪となって降ってくる時期、台湾に心配なし。

㉑「大雪」、小雪より寒い時期であり、台湾には三千メートル以上の玉山、合歡山の頂上に雪が少し降るが、平地では四季如春である。

㉒「冬至」、夜は一番長く、昼は一番短かい日である。冬至の日をすぎると、昼は次第に長くなる。台湾俗諺「冬至一陽生」、現代口語：冬天到了，春天的脚步不会太远。「剝極而復」「物極必反」の形容もある。昔はこの日、皇帝が衆臣を率って天地と宗廟を祭祀し、新年の曆書を頒布した。台湾の民間社会において、この日は婦女が「甜湯圓」を作り、家族に食べさせ「吃了冬至圓，歳数長一年」と祝う。

㉓「小寒」、冬至より一陽起きるが、いわゆる「一陽来復」故に陰気に逆う故、益々冷えることがある。

㉔「大寒」、冷えることの至りて甚だしきとなる。大寒は二十四節気の最後の十四日間、十五日間である。大寒の寒さを耐え、この時期を過ぎると、新しい一年の「立春」が来る。大地が再び「鳥語花香，風臨大地，歡喜無限，春到人間，福樂迎門，上通下達，萬事如意，喜洋洋」の俗諺の風景が目に移る。「否極泰来」もいわれる^(注⑩)。

太陰暦の二十四節気の移り変わりによって、「以農立国」の台湾の民間生活の秩序も見い出すことになるであろう。

六 むすび——太陰暦と台湾の宗教教化思想

台湾の開発は中国南部の福建・広東両省の人口移動により、南部から北部へ、西部から東部へという順序で今日に至る。漢民族の移住により、生活必需品として、太陰暦をも台湾に持ち込んだ。太陰暦の二十四節気に従って農耕生活をうまく営む。また、人間の一生涯と深い関わりのある生、老、病、死、冠、婚、葬、祭などの式典を必要とする。中国人には古くから人間の苦難を解決してくれる様々な神仏があると信じ、これらの神仏に念願成就の後、報恩の気持ちで、神仏の寺廟にて様々な催し、例えば、吹奏楽団の演奏、歌仔戯などを行ない、自分自身も家族も神仏の存在を近く、強く感ずるようになる。こうして民間社会に宗教の信仰が社会円満互補の必要性となる。

ただし、宗教信仰が台湾社会の現代化を阻止する絆脚石、道徳意識を神仏威厳の上において、人性の尊厳と主宰性は影響される疑問も派生する。

当然、社会の運営が、時偶、不合理的な面もある。神仏信仰を強調すると、社会の人文階層を低降される現階段の社会状況がある。ただし、否認できないのは、民間社会の宗教信仰により、低次元階層で伝統文化を維持する総体理念がある。知識文化人（インテリ）の誠の重要視を受けられ、くり返し反省と偏る面を矯正さ

れ、合理的な発展の道案内として指導すると、文化創造の潜在能力がより一層発揮でき、合理性ある健全な現代化社会が形成できるであろう(注②)。

台湾の暦はすなわち「拜拜の暦」といっても、その宗教信仰の民間社会における宗教思想と社会文化の配合が単に形而上的な宇宙理論と信仰情操だけではなく、民間社会の人間個々人の深層神靈秩序と情操の発抒以外に社会安定の発展を追求し、天命思想を通して、人間関係を円滑的に運び、社会文明の合理発展を示す。そこから、政治的・社会的にも天界の秩序に従い、天界の指令をそのまま実行する「中国」(中なる国=天道と人道の出会い)の思想が生まれたのであろう(注③)。

台湾の閩南社会に伝わって来たたくさんの教化歌、「勸世歌」とも俗称し、宗教思想と社会教化を調和し、歌謡の通俗性と普遍性を通し、社会教育を進み、こうして、昔の素朴な民俗風習を維持できた主な条件、例をあげてみる。

1. 壞事勸人休莫做，拳頭三尺有神明；
善惡到頭終有報，只爭慢早不是無。
2. 馬有千里的賢走，無人曾得到人兜；
勸人不免箱計較，命運乎人所曾賢。
3. 一人一款的形相，世間的人有奸忠；
甲因父母都無量，乎伊曾好天不從。」(注④)

第1曲は人間が悪事から離れる勸世歌，善惡の因果応報が主な根拠である。第2曲は，人事を尽して，天命を待つ。人間社会におけるいかなる事に，あまり執着心を持たないこと。第3曲は天は人間の善なる行ないをいつも観察記録してあり，悪行ある人に良い報いが来ないという天の理(法則)である。

以上3曲民間社会の「勸世歌」に「聽天由命」の宗教教化の力によって，人間の修善改惡の心を勧め，民族文化の慧命を啓開する。民間社会における宗教思想と社会文化の結びにより，社会体系の脈絡結構になる。社会の変遷に従って発展を現わす。「勸世歌」：「要論天堂地獄裏，做好做壞朗巢知，天地日月相交易，又神又佛塊

推排。」のなかに佛法による天命思想を体現する。今日の基層民間社会に外来の宗教組織が増え，思想の主題が三教合一の中心から五教合一，万教同源に発展し，万教の形態が異なっても，本質的な「善」の出発点が一致し，人の心の「正心修性」を主張し，社会秩序の安定調和を促す宗教思想が外来のあらゆる基因も加わっているが，「人性」の人交精神を主にして世界五大宗教ないし万教の教理を統合する(注⑤)。

「九月行善梨花香，莫聽閑言乱心腸，是是非非無3日，各人修善轉天堂」の「勸行善」教化歌により，善は万教の本源，心性を磨き，天道に合わせ，これも民間宗教思想の特色であり，靈明円通の神佛世界を通して，倫理道徳を統合し，清明なる本性を高め，社会の倫理秩序を維持する。

今日の台湾で，政府から民間まで全国的に使用している暦をみると，右側に太陽暦，左側に太陰暦，右側に政府が定める国定祝，祭日が書かれ，左側に神仏の生誕から吉凶方位，天干地支，伝統行事が書かれ，この特殊な地域色彩に目を向くと，実に相当なる宗教信仰心であり，教派多彩多様，寺廟殿堂の林立，とくに台湾本土宗教の変遷が注目の的になり，台湾本土宗教もまた伝統的な民間思想を主にして，社会全体の調和を重点に置き，伝統文化の社会秩序を維持する役割をはたす。本文が太陰暦にある二十四節気の農時リズムを通して，台湾の人文社会の歴史変遷と民間社会における宗教信仰の形成と伝統文化の維持を客観的・合理的な視点で探究した一試論である。

とわに社会変遷の天の理(法則)に対応し，伝統文化と現代生活を結び，時代的な使命を付加することは現在の社会問題研究の課題でもあり，これからの専門的な分野の研究を重要視されることが期待すべきである。

注

- ① 中華国内政部1988年資料「鄉鎮公所人口普查報告書」。
- ② 中華国内政部1988年資料「台湾地区民俗調査

- 研究」。
- ③ 陳英捷、『現代中国の宗教趨勢』台北，文殊出版社，1987年。
- ④ 班固著『漢書』，凡百二十卷，後漢の班固が父班彪の志を継いで書いた前漢一代の記録歴史書。
- ⑤ 陳壽（233～297）の歴史著作。『三国志』，六十五卷，晋時代の作品，二十四史の一つ。
- ⑥ 魏徵（580～643），『唐詩選』の冒頭詩「述懐」の作者，初唐の政治家・詩人，唐太宗を輔佐して「貞観の治」をもたらした。
- ⑦ 魏徵ら編集，『隋書』，八十五卷，二十四史の一つ，唐太宗の命により編集した隋の正史，636年成立。
- ⑧ 宋朝は北宋と南宋が二つ分かれてあり，北宋（960～1127）は宋太祖から宋徽宗・宋欽宗の「靖康之禍」亡国になるまで168年間。南宋（1127～1279）は宋高宗即位してから，文天祥と皇帝昺の死難まで153年間。
- ⑨ 山辺健太郎編『台湾』全二冊，現代史資料21号，22号，みすず書房，昭和50年。第一篇11～16頁。
- ⑩ 同上，第一篇20～32頁。
- ⑪ 澎湖を治めるため，鄭成功は安撫司を設け，南路に万年県，北路に天興県を置いた。
- ⑫ 井出李和太著『興和の台湾史話』，昭和10年。
- ⑬ 中華民国歴史編譯館編『高中歴史教科書』第二冊清代史，1985年版137～195頁参照。
- ⑭ 黄昭堂著『台湾総監府』，教育社，1981年。239～270頁参照。
- ⑮ 同注⑭。
- ⑯ 藪内清著。「殷代の暦法—董作賓の論文について」（『東方学報』京都第21冊，1952年刊。）
- ⑰ 藪内清著。「殷暦に関する二，三問題」（東洋史研究，第十五卷，1958年刊。）
- ⑱ 中華民国文化資産維護学会，『台湾地区民俗調査研究』1990年，287～288頁参照。
- ⑲ 日本交通公社。『台湾の旅』1987年，1～5頁参照。
- ⑳ 洪進鋒著，『台湾民俗之旅』武陵出版社，1990年1月。19～38頁参照。
- ㉑ 同注㉑。
- ㉒ 唐君毅，「文化意識と道徳理性」第7章人類宗教意識之本性与其諸形態。学生書局。1975年。
- ㉓ 鍾清漢，「中国文化と日本・韓国・東南アジアとヨーロッパへの影響」，文化女子大学研究紀要第22集，1991年。177頁。

- ㉔ 同栄杰，『台湾諺語詮篇』，大舞台書苑出版社，1978年。
- ㉕ 鄭志明，『台湾民間儒宗神教的宗教体系初探』，学生書局，1988年，133～135頁。

参 考 文 献

- 1 中華民国文化資産維護学会編，『台湾地区民俗調査研究』内政部出版，1990年12月1～362頁参照。
- 2 鈴木清一郎著，馮作民訳。増訂『台湾旧慣習冠婚葬祭と年中行事』衆文図書股份有限公司，1989年11月1～657頁参照。
- 3 片岡 巖著，陳金田訳。『台湾風俗誌』衆文図書公司出版，1987年3月，1～710頁参照。
- 4 アジア文化総合研究所『アジア文化』第13号。
- 5 鄭志明著『中国社会与宗教』台湾学生書局印行。1986年7月初刷。1989年11月2刷，1～380頁参照。
- 6 鄭志明著『台湾民間宗教論集』台湾学生書局印行。1984年9月初刷。1988年3月第2刷，1～225頁参照。
- 7 劉 岱總主編『中国文化新論——根源篇，永恒的巨流』聯経出版事業公司。1981年9月初版，1983年4月再版，1～556頁参照。
- 8 劉 岱總主編『中国文化新論——宗教禮俗篇，敬天与親人』聯経出版事業公司出版。1982年8月初版，1983年4月第2刷，1～674頁参照。
- 9 林 明義主編『台湾冠婚葬祭家禮全書』台湾陵出版社出版，1987年7月初刷，1989年1月第3刷，1～378頁参照。
- 10 洪 進鋒著『台湾民俗之旅』，1990年1月初刷，1～397頁参照。
- 11 永田 久『年中行事を科学する——暦のなかの文化の知恵』1～260頁参照。
- 12 内田正男著『暦と日本人』雄山閣，昭和50年11月5日初版，昭和56年6月20日第三版。
- 13 石井慎二編集，JICC 出版局，別冊宝島127号『謎の島・台湾』1991年2月発行。1991年8月10日第5刷，1～271頁参照。
- 14 日本交通公社，『旅のガイドブック——台湾』1988年版。
- 15 近畿日本ツーリスト，18号『台湾の本』，1990年初刷。
- 16 黄 昭堂著『台湾総督府』教育社歴史新書〈日本史〉，1～147頁参照。

- 17 藪内 清、『増補改訂中国の天文暦法』平凡社、1990年11月20日刷。
- 18 鈴木 明、『台湾に革命が起きる日』メディアファクトリー出版社、1990年10月20日版。
- 19 鈴木 明、『誰も書かなかった台湾』サンケイ出版。
- 20 ブリタニカ国際大百科事典、ティビーエス・ブリタニカ発行、1974年4月出版、1984年10月改訂版発行。
- 21 世界大百科事典。平凡社。1981年4月初版発行。
- 22 万有大百科事典。小学館、昭和50年3月初版、昭和58年6月2版14刷発行。
- 23 渡辺敏夫、『暦のすべて』雄山閣、1980年版。
- 24 暦の会編、『暦の百科事典』、新人物往来社、1986年版。
- 25 宮本常一著『民間暦』講談社、1985年版。
- 26 台湾新生報社編、刊『台湾年鑑』1947年。
- 27 台湾通信社編、『台湾年鑑』、1944年版。
- 28 小島祐馬『古代中国研究』、筑摩書房、昭和43年11月20日発行。
- 29 李家正文『東アジア史の謎』、泰流社1989年。
- 30 陳舜臣『中国の歴史』、平凡社、1983年6月9日初版第一刷。
- 31 竹越与三郎『台湾統治史』博文館、明治38年。
- 32 東郷実・佐藤四郎共著『台湾植民発達史』晃文館、大正5年。
- 33 山辺健太郎編『台湾』全二冊、現代史資料21、22、みすず書房、昭和50年。
- 34 許世楷『日本統治下の台湾——抵抗と弾圧』、東京大学出版会、昭和47年。